
あの事は誰も知らない

?鬼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの事は誰も知らない

【Nコード】

N7458Z

【作者名】

? 鬼

【あらすじ】

慶介と香が乗っていたバスが突然バスジャックされる。

犯人の発した言葉。「殺し合って下さい」

慶介と香を含む、乗客全員を巻き込んだ事件。

この事件の真の黒幕は一体誰なのか？

慶介は事件の真相を暴く事は出来るのか。

第1話 終わりの始まり

あの事件はいまだにニュースに出る事はない。

あんなにたくさんさんの命がなくなったというのに…

8月14日

すずきけいすけ

鈴木慶介と佐藤香さとうかほは幼馴染の恋人同士だった。

この日、二人はデートに行っていた。理由は香の誕生日だったからだ。

付き合つて2カ月になるが今日が初めてのデートだった。

「はあ…」

慶介は小さくため息をついた。

時刻は10時36分。

待ち合わせの時間からすでに6分も経過していた。

(遅いな…)

慶介は携帯を取り出し電話をしようとしたその時だった。

「慶ちゃん」

香の特徴的のかん高い声が聞こえてきた。

「ごめんごめん寝坊しちゃって」

香は笑顔のまま謝った。

「お前反省してねえだろ」

「えー反省してるよ…待った？」

呆れたように慶介が答える。

「当たり前だろ。後50秒も遅れてたらバス行ってたぞ」

「ごめんね」

香は舌をチロリと出した。

「さあ行こうか」

慶介が右手をスツと差し出す。

香は慶介の右手を握りながら答えた。

「うん初めてのデート楽しみだね」

「そうだな」

二人は笑いながらバスに乗った。

慶介と香がバスの中で、会話に花を咲かせていると、遊園地に到着した。

30分ほどかかっていたが、慶介たちにとってはあっという間に時が過ぎたような気がした。

香は遊園地に着くなり、テンションを上げ、嬉しそうに慶介の右手を引っ張りながら、園内を駆けまわった。

「あれに乗ろう」「これに乗ろう」「あそこでパレードをやってるよ」

無邪気な子供のように嬉しそうな声で話す香。

慶介もそんな彼女の傍にいられるだけで喜びを感じた。

プリクラにジェットコースター、お化け屋敷にパレード。

気がつくとすでに17時を回っていた。

楽しかった分、時間が経つもの相当早く感じるものだ。

「もう閉園時間もギリギリだし、帰ろうか」

「え〜！ もう帰るの？ あとちょっとだけ…」

駄々をこねる香に強引に言い聞かせ、慶介は遊園地を後にした。

これからあんな事が起こるとも知らずに…

殺しあってください

「あゝ楽しかったね」

香は背伸びをしながら言った。

「じゃあ帰ろっか」

「そうだな…っていうかお前はしやぎすぎだろ。保育園児か？」

「そんなことないよ。慶ちゃんのが楽しそうだったよ」

二人はこの様な内容の会話をしながらバス停へ向かった。

慶介たちがバス停に到着すると同時にバスが停車した。

二人は楽しそうな笑みを浮かべながらバスへ乗り込む。

扉が閉まり、ゆっくりとバスが動き出した…。

バスが動き出してから間もない頃。恐怖のあの事件が起こるまでもう数分もない。

しかし時の流れは無情にも刻一刻と過ぎ去り、直前までは考えすらもする事がなかった“あれ”が始まった。

楽しく話す慶介と香の後ろの座席に座っていた男が、突然静かに立ちあがった。

黒いコートに黒いニット帽を被った男がゆっくり前へと歩いて行く。そして運転手の横に立ちこう言った。

「みなさんこのバスはある事をしない限り止まりません…」

バス内がざわつく。

「ふ…ふざけるな。何を言っているんだ」

意味が分からない、と言わんばかりに中年の運転手が男を睨みながら言った。

「そうだ！ 運転手さんもこのゲームに参加してください。運転は私が出しますので…」

「ばかなことを言うな！ 代わる訳ないだろ！」

「そうですね…じゃあ力づくで代わらせていただきます」

そう言っつて男は内ポケットから拳銃を取り出した。

「代わらないというなら仕方ありません。さよなら…」

「ま…待て！ 待つてくれ！ 代わる。代わるから撃たないでくれ」
「そう言っていただけで何よりです」

男が立つたままハンドルを握り、その間に運転手は運転席から移動した。

運転席に座り、男はこう言い放った。

「私が隙だらけで殺すなら今だ！ と考えている人はいつでも殺していいですよ。私が死んだ場合、心拍数が停止した事がバスに仕掛けた爆弾に伝わり、このバスは爆発します」

「な…なんだって!？」

若いサラリーマンが驚きの声をあげた。

「そうだ!! 忘れていたよ。運転代わって」
運転を代わり男は黒いコートを脱いだ。

ジャケットの裏を見て、慶介は啞然とする。

なんとコートの裏に、何十と言う数のナイフがあっただのだ。

慶介の腕を掴み、震える声で香が言った。

「慶ちゃん…怖い……」

震えている香をギュッと抱きしめ、慶介が答える。

「俺だつて怖いさ……」

そんな会話をしている間に、男は客一人ひとりにナイフを配り始める。

もちろん香や慶介にも…。

そして男はこう言った。

「今から皆さんにある事をしていただきます。そのある事とは…」

慶介の脳裏にとつてもない考えが浮かんだ。

(まさか！ 全員にナイフを配ったってことは……)

慶介は周りを見渡す。

どうやら他の乗客も分かっているようだった。

「みなさんで……」

ゴクリと慶介が生唾を飲み込む。

「殺しあつて下さい」

そして男はニヤリと笑い運転を代わった…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7458z/>

あの事は誰も知らない

2011年12月31日23時51分発行